花橘

発行日
令和７年11月27日
第９号
発行・編集
三崎高校総務課

理想は高く希望あふるる花橘に栄あれ

総務課長　津田　一幸

皆さんが三崎高校への進学を決めた理由は何だったでしょうか。「家から近いから」、「地域活動をやってみたかったから」、「寮があったから」。この辺りがよく聞く理由でしょうか。

自分が中学校三年生の時はどうだったのかというと、ほぼすべての友だちが当たり前のように「地元だから」と三崎高校への進学を決めていました。自分も三崎高校を第一希望に、とはならずに松山の学校への進学を考えたこともありました。当時の三崎高校はいわゆる「荒れている」状態で、ここでは特にやりたいことも見つからないような気がしていたからです。残念ながら、入学してからもその印象は変わらず、日々をやり過ごすような三年間でした。

大学時代の四年間を福岡県で、新規採用の三年間を四国中央市で過ごした後、自分の希望よりも早く母校に戻ってきました。二十年前の三崎高校は、少子化の影響を受けながらも何とか持ちこたえているような状況でした。八年間の担任生活で「高校時代にやれなかった、自分が楽しいと思えることをする」と言っては教室でメダカやクワガタムシを飼ったり、渡り廊下で野菜を育てたり、文化祭でハニートーストや肉巻きおにぎりを売ったり、合唱コンクールで「アンパンマンのマーチ」を歌ったりしました。その時の生徒たちがどれだけ楽しかったのか知る由はありませんが、自分の思い描いていた「楽しい高校生活」を取り戻すように楽しい日々を過ごしました。

そんな三崎高校も地元中学校の生徒数の減少もあり、ますます生徒数が減っていきました。「生徒数を増やさなければ」と多くの方々と生徒数確保に向けた話し合いが持たれましたが、「中学校の保護者に子どもを三崎高校に来るようにお願いする」という案がせいぜいでした。正直に言って、口では「何とかしないと」と言いながらも、心の中では「子どもがいないのだからどうしようもない」と諦める気持ちもありました。しかし、皆さんもどこかで耳にしているように多くの人たちの情熱と努力、少しの幸運にも恵まれて三崎高校は何度も危機的状況を跳ね返し、今でもこの高台に在り続けています。「近いから」という消極的な理由だけではなく、「行きたいから」と積極的に選ばれるようになった三崎高校。三崎高校の未来はこれまで以上に予測がつきません。しかし、間違いなく言えるのは「三崎高校を作っていくのは自分たち自身」ということです。そのためにも、誰もが卒業して何年経っても笑い合える高校生活を送ってほしいと思います。いつまでも母校が在り続けることを願って。

文化祭

11月３日（月）に「届け～未来に残る三崎の伝統～」のスローガンのもとで文化祭を行いました。みさこう応援団、みさこう郷土芸能、吹奏楽部は迫力満点で素敵なステージを披露してくれました。クラス対抗合唱コンクールでは、この日のために練習を重ねたハーモニーが響きました。結果は３年２組が最優秀賞、３年１組が優秀賞を獲得しました。どのクラスの合唱も心のこもった素晴らしいものでした。

また、クラスごとに特色ある展示や模擬店が行われました。合わせて、地域の業者の方々による出店もあり、多くの来場者の方々に楽しんでいただくことができました。

体育館での有志発表では、思い思いの方法で自分を表現する姿が見られ、会場全体が大興奮でした。天候にも恵まれ最高の思い出ができました。御協力、御来場いただいた皆様、本当にありがとうございました。